

避難時の心得

万一、洪水の危険が迫ってきたら、冷静に状況判断しながら、安全な避難を心がけてください。

避難の呼びかけに注意を



危険が迫ったときには、町役場や消防署から避難の呼びかけをすることがあります。呼びかけがあった場合には、速やかに避難してください。

動きやすい服装、2人以上での避難



避難するときは、動きやすい服装で、2人以上での行動を心がけましょう。はだし、長靴は禁物です。動きやすい運動靴をはきましょう。

歩ける深さ男性70cm、女性50cm



歩ける深さは、男性で70cm・女性で50cmまでです。水深が腰までであるような高いところで救助を待ちましょう。

水面下は危険です



水面下にはどんな危険が潜んでいるかわかりません。長い棒を杖代わりにして安全を確認しながら歩きましょう。

車での避難は控えて



自動車での避難は緊急車両の通行の妨げになりますので、特別の場合を除き、やめましょう。

▶ 水害後、注意すること

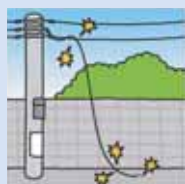
安全の確認



LPガスボンベに異状はないか？安全確認をする。たばこやその他の火気厳禁。



危険物の漏れ出しはないか？発見したら周りに注意を呼びかけ、必要に応じて消防署へも通報して適切に処理する。



断線がないか確認。子供たちの接近禁止。電力会社への通報。



屋根瓦やアンテナなど、頭上の危険物を除去する。

衛生対策の徹底



浸水の後には、床下、庭、家の周りに石灰をまいて消毒。



床上浸水があった場合は、畳や食器戸棚、食器類、その他家具調度品をクレゾール石けん液で十分に拭き、日光消毒も十分する。

普段からの備え

雨水の大半が下水道や側溝に集中すると、短い集中豪雨でも水害が発生することがあります。浸水防止のために早めの対処が必要です。

避難場所や避難経路を確認しておく



この地図には、洪水時に避難する場所が示されています。自分の地区の避難場所はどこなのか、そこへ安全に行くためにはどのような避難すればいいのかを確認しておきましょう。

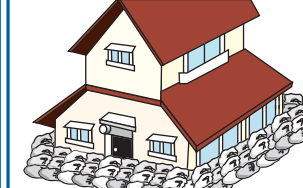
※避難経路には、危険箇所（マンホール、側溝、小河川）などないか、確認が必要です。濁流で冠水した場合にそうした危険箇所は見えにくくなります。

大雨や台風に備えて家のまわりを点検・整備



家のまわりに吹き飛ばされそうなものはないか、雨戸や雨どいなどはいたんでいないか確認しておきましょう。また、家の前の排水溝が詰まっていないかなどの確認も必要です。

土のうで浸水防止



土のうを積み上げることで、水や土砂の移動を妨げることができます。水害時には、浸水を防ぐ応急対策として必需品です。

室内の防災対策



家電製品や大切なものは、浸水して被害を受けないように高い所や二階に移動します。電気コンセントは漏電、感電などの障害になる可能性があるため、浸水しても大丈夫な場所に移動（移設）しましょう。

土のうとは？

約横40cm、縦70cmの大きさで、上部に締めて閉じるひもがあり、(ビニール、合成繊維)。袋の7~8割ほど土を入れたものです(重さ30~50kg)。



※一般家庭で土や砂を用意することが困難な場合は、40リットル程度のゴミ袋を二重にして水を半分ほど入れ、ダンボール箱に入れて並べたり、土を入れたプランターをレジャーシートで巻いて止水板とする方法もあります。

▶ 地下空間の危険性

水害のおそれがあるときには、地下空間にいる人は地上階に上がりましょう。



地下室では外の様子がわかりません。

地下室では雨の強さや天候の急激な変化がわかりませんので、気象情報などの注意が必要です。また外の様子に変化があったときは地下室の人に知らせましょう。



浸水すると停電するおそれがあります。

停電すると電灯が消え真っ暗になります。なお、エレベーターは使えません。



水圧でドアは開きません。

ある程度浸水すると、外開きでも内開きでもドアを開けることはできなくなります。



地上が冠水すると一気に水が流れ込んできます。

換気口、採光窓等、思わぬところから入ってくる可能性があります。また、流れ落ちる水で階段は登れません。